

新教材

作者・筆者より

これまで、弊社ホームページや、「国語教育相談室」などで、作者や筆者が作品に込める思いをうかがいました。その一部をご紹介します。

「新しい短歌のために」 (2年)

ばば
馬場あき子



なにより、中学生に短歌を好きになってもらいたいという思いです。(中略) 詩や歌曲をはじめ、いろいろなものが散文的になっています。だからこそ、これからの時代を生きる子どもたちには、響きや韻律による言葉の豊かさ、美しさ、うるおいといったものにしっかりとふれてほしいと思っています。

(中学校「国語教育相談室」64号より抜粋)

「星の花が降るころに」 (1年)

あんどう
安東みきえ



この頃の子どもって、特に友人関係では、ほんとうに小さな悩みでも、すぐ落ち込んでしまいます。(中略) いっぱい嫌なことはあるけれど、それでも頑張ってそれを「やり過ぎ」タフさをもってほしい。そんな願いを、最後の「大丈夫、きっとなんとかやっていける。」という言葉に込めました。

(中学校「国語教育相談室」64号より抜粋)

「アイスプラネット」 (2年)

しいな まこと
椎名 誠



僕は子どもたちに、スケールの大きなことを考えたり、やったりしてほしいと思っています。現代社会は、ともすれば小さい枠にはめ込もうとする力が強く働いています。そこから外に出る力をもってもらいたい、というメッセージを込めました。

(中学校「国語教育相談室」64号より抜粋)

「シカの『落ち穂拾い』」 (1年)

つじ やまと
辻 大和



教科書に掲載したのは、宮城県金華山島でニホンザルの食物の調査中に、たまたま観察した出来事がきっかけで、はじまった研究についての内容です。(中略)

読者のみなさんには、身近な生き物たちのつながりに関心をもていただき、「生物多様性」だとか「生態系」というキーワードが、決して遠い世界のことでなく、ごく身近にあるのだということに気づいてもらえれば、と思います。

(『学習指導書1年』『筆者の言葉』より抜粋)

「蟬の声」 (3年)

あさだ じろう
浅田次郎



僕は、自分の書いたものによって、百人に一人、千人に一人でもいい、きちんと自分の人生を見つめ、方向を考えてくれる子どもがいてくれれば、それでいいかなと思う。戦争、祖父と孫、そういうテーマを通して、自分たちの血脈を真摯に見つめてもらうこと。この作品が、そういう一助になればと願っています。

(中学校「国語教育相談室」64号より抜粋)

「月の起源を探る」 (3年)

こく ぼえいちろう
小久保英一郎



自分で研究をするようになってから月の見方が少し変わったように思います。今は涼しい顔をしている月ですが、衝突と集積という激しい過程を経て熱く生まれてきたかもしれない。そう、月は地球形成の名残の月ともいえるのです。(中略) 最近は、理科が好きではない生徒が多いと聞きます。科学は自然を読み解くすばらしい学問であり、楽しいものだということが少しでも伝わればうれしく思います。

(『学習指導書3年』『筆者の言葉』より抜粋)

「君は『最後の晩餐』を知っているか」 (2年)

ふ せひでと
布施英利



僕は、初めてこの絵(「最後の晩餐」)の前に立ったとき、なぜか「カッコいい。」と思った。それはただ直感というのか、芝居の舞台で、幕がパッと上がった瞬間と似ています。修道院の食堂に入った瞬間に、「わっ」、「カッコいい」、という感じでした。理屈ではなく、名画が直接心に与える衝撃とでもいうのでしょうか。この教材には、その衝撃がどこからきているのかを書きました。

(光村図書ホームページ「シーズン・インタビュー 2011 年春」より抜粋)